

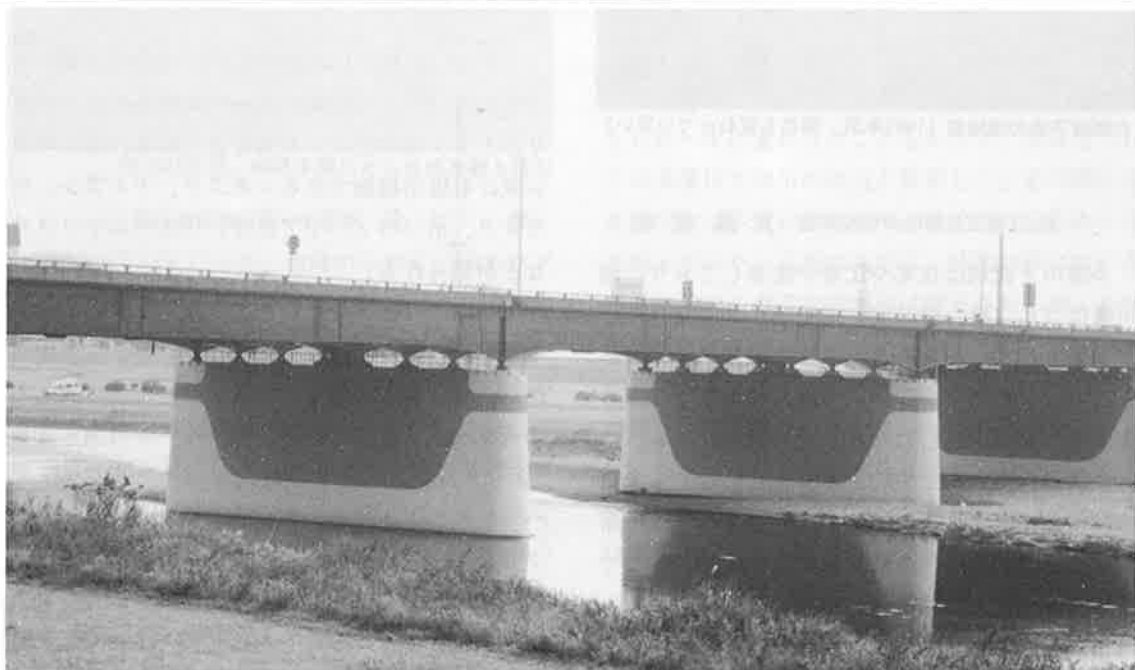
財団だより

多摩川

1991. 3 第49号



ウラナミシジミ(シジミチョウ科)
 開張33mm。出現期8～10月。翅は、表は薄い水色、裏は薄い褐色。食草マメ科の植物。



橋脚が化粧直しされた第三京浜新多摩川橋（平成2年11月撮影）

■ 多摩川現風景 ■

(5) 橋の化粧直し

河川景観についてのレポートを初めて見たのは1982年に出された建設省九州地建菊池川工事事務所による「河川景観計画マニュアル(案)」であった。それから10年、河川景観に関する動きはいくつかの話題を提供してきた。そのひとつに多摩川で最初に試みられた「多摩川八景」の選定(1984年)がある。そして、このところ河川関連施設としての橋梁の化粧直しが多摩川でも行なわれている。

多摩川に現存する橋で最も古いのは六郷橋と二子橋で大正14年に架けられたもので、次いで日野橋と東横線多摩川橋梁の大正15年である。それ以外の橋はかなり新しく、大半は昭和30年代以降のものが多い。多摩川の橋は趣きがないとよく言われるが、それは隅田川に較べて言われることで、奥多摩のつり橋を含め、ひとつひとつ見ていくと

一概にそうとも言えない。大師橋(1939年完成)や六郷橋といった古い橋、奥多摩のつり橋、そして青梅市の郷土館前にある鮎美橋(1983年完成)など相当景観を意識したものといえよう。

現在化粧直しが終わったのはほんの数例であるが、その是非は別にして今後、どう展開していくか楽しみである。

● 関連する財団の助成研究

<学術研究>

- ① 多摩川における河川空間の整備に関する基礎的研究
 篠原 修 1978年 No.9
- ② 多摩川水系のアメニティ構造解析に関する研究
 杉尾 伸太郎 1981年 No.34

<一般研究>

- ③ 橋梁による多摩川の地域文化の変貌と環境破壊の調査研究
 石井 作平 1981年 No.14

多摩川散歩



六郷橋下流の湿地帯（1985年頃、現在も変わっていない）

元、江東区立南砂中学校教諭 大森 武昭

多摩川下流域は住宅や工場が密集しており、河川敷はゴルフ場、野球場、運動場、公園などとして整備されているため自然のまま放置されているところはきわめて少ない。多摩川の水は上流域の下水道の整備が進むにつれ良化の傾向にある。

京浜急行の六郷土手で下車徒歩5分程で多摩川の河川敷に出ることができる。六郷橋の下流一帯に広がる湿地帯は残された数少ない湿地の一つである。この付近は満潮時に海水が流入し、淡水と海水が混じりあう汽水域となっている。このような環境には他の地域では見られない動植物が見られる。植物ではシオクグ、アイアシ、ウラギクなど塩分に耐える特殊な機能をもった塩沼植物が見られる。また、このような汽水域にのみ幼虫が育つヒメマイトトンボもこの湿地帯に見られる。このトンボは5月下旬に羽化が始まり6月中旬から急激に数が増え7月にピークに達し8月まで見ることができる。春先にはモンシロチョウ、スジグロシロチョウ、モンキチョウ、ベニシジミが土手を飛び交い、夏になると

シオカラトンボが目につき時にはギンヤンマが飛来することもある。湿地帯にはヒメマイトトンボに変わってアジアイトトンボの数が次第に多くなっていく。秋になるとアキアカネ、ノシメトンボ、ウスバキトンボなどが多くなる。秋から冬にかけてオナガガモなどの沢山のカモ類や水鳥が多く飛来する。また、アシ原にはオオジュリンが訪れる。

土手沿いに河口に向かって20～30分ほど歩くと大師橋につく、大師橋を渡って川崎側の土手を下りるとアシ原が広がり干潟も見られる。このアシ原にも塩沼植物であるシオクグ、アイアシ、ウラギク、ホソバノハマアカザ、ウスベニツメクサなどが見られる。

アシ原にはヒメマイトトンボ、アジアイトトンボなどのイトトンボ類も生息している。ここから河口一帯は神奈川県下では数少ない干潟の鳥たちの飛来場所になっている。春（4～5月頃）と秋（8～9月頃）の渡りの時期にはキョウジョシギ、ハマシギ、アオアシシギ、チュウシャクシギ、オグロシギ、トウネン、メダイチドリ、シロチドリ、ムナグロなどのシギ、チドリの仲間が数多く訪れる。冬期にはオナガガモをはじめとする多くのカモ類を観察することができる。

帰りは京浜急行の大師線終点の小島新田駅まで場所にもよるが約15分程で着くことができる。

(案内図)



私と多摩川



昭和48年頃、和泉多摩川から多摩丘陵を望む

狛江市立狛江第一中学校 井上 孝

昭和28年の夏だった。当時の小学校にはまだプールなどなかったから小さな子供達は水を求めて近くの川に出かけていった。ちょうど私の勤めていた武蔵野第二小学校でも、PTAの主催行事の一つとして是政橋の下で水泳大会を行っていた。

当時の是政橋（昭和16年架橋）はまだ木の橋で、上を自動車を通るたびに橋板がガタガタと大きな音をたてて騒々しかったが、それでも河原で唯一の日陰だったので、休憩所としてその下で昼寝や昼食をとっていた。そして青々と透き通ってきれいだった多摩川で子供達と一緒に水に頭を入れては、また、水のかけっこをして遊んでいた。

やはりその年の秋頃だったと思うが、PTA主催の見学会で小河内ダムの建設現場に行った。大きなコンクリートのかたまりが川をさえぎるように積み上げられ、谷間を渡るロープからは盛んにコンクリートが運ばれて工事が進められていた。当時の東京では多摩川の水への依存度が高かった（昭和31年度 多摩川系68%、江戸川系29%、地下水3%）このダムができると東京都の水不足が解消され、また、ダム下の発電所は東京都の所有なので、そこで起こされた電気は都電の動力源になるという話を聞いて帰ってきた。

PTA主催の多摩川水泳は翌年も行われたが、その頃から多摩地区にだんだんと住宅が建つようになり水質が少しずつ悪くなってきたのだろうか、

昭和30年の夏にはPTAの多摩川水泳は取りやめになった。それでも多くの人達は泳いでいた。

多摩地区に本格的に団地や工場が作られるようになったのは昭和30年代に入ってからである。多摩川流域だけでも32年に国立、33年に多摩平、35年に府中と団地が建設されている。

私が再び多摩川を友とするようになったのは昭和35年の夏であった。住居を日野に移し、勤務先も日野一中に変わったこともあって、生徒をつれては多摩川や浅川の岸辺を散策した。その頃になると完全に水質が悪くなり、泳ぐ人の姿もめっきり減っていた。下流の方では、昭和36年には和泉多摩川での小中学生の水泳は禁止され、向ヶ丘遊園のプールに行くように指示が出されたり、昭和40年には京王多摩川での大腸菌が水100cm³中110万単位という記録さえ出たという話を聞いた。それでも河原は広々とし、多摩丘陵はきれいだった。そして百草園から見おろす多摩川と浅川の合流点は水田の彼方に明るく輝いていた。

多摩丘陵の宅地化は平山城址の下から始まった。平山橋から眺めると、無残に緑が削られて、その北斜面にみるみるうちに住宅が建ちならんだ。昭和40年頃だったのだろうか。当時は野猿峠ハイキングコースというのがあった。高幡不動から野猿峠まで多摩丘陵の尾根伝いに歩くコースで、途中平山城址公園には資料館やレストハウス、子供遊園地、野外ステージ、猿小屋などがあって、多くの家族づれやハイカーが訪れていた。そして六国台展望台からは眼下に浅川の流が眺められ、その下には野鳥を食べさせるところがあったが、羽毛を抜かれ、串に刺された野鳥はあまりにも痛々しく、二度と行く気はしなかった。

昭和42年の暮、再び住居を狛江に移した。たとえ水が汚れても多摩川は心の故郷である。まだ小さかった子供達をつれて、凧揚げやボート乗り、つり人を眺めながらの堤防の散策も楽しいものの一つだった。



川沿いに建つ高層マンション (青梅市)

多摩川紀行

⑧東青梅下奥多摩橋～羽村堰(5km) 山道省三

強力な寒気団が日本列島を被った2月23日(土)によいよ上流部最後の区間を下ることになった。青梅の川沿いの樹林はまだ冬枯れで新芽の気配すらない。この日は風が冷たく薄曇りでいささか戦意喪失がみだったが、川の中に入って寒バヤ釣りをしている人達を見て思い切ることにした。

気温9度、水温7度。流れに足を入れると切られるような冷たさである。多摩川も青梅市の神代橋を過ぎると川幅も広く流れもゆったりしていて、快適な川下りができる。むしろ冬場は水量が少なく、下奥多摩橋から下にかけてはかろうじて底をすらない程度の所が多かった。

青梅市の市街地から河辺、小作、羽村と続く川沿いの景観はまさにマンションラッシュの趣きがある。青梅市の人口は平成3年(1991年)2月1日で124,911人となり10年前の1980年で約96,000人に比較すると約30%以上の増加となっている。青梅線から見る風景は都心に近い住宅地を思わせたが、川沿いの段丘崖まで住宅が押し寄せてきた。この傾向は左岸側がとくに目立つ。

奥多摩橋下の小作堰は多摩川からの取水強化のため昭和54年に作られた水道用取水堰だが、堰下から流量が極端に少なくなる。東京都はこの小作堰と下流の羽村堰の二ヶ所から上流の水のほとんどを取水し村山の貯水池へ送っている。このこともあって、とうとう水深10cm程の浅瀬が100m程

続きカヌーを引いて水の中を歩くはめになった。

右岸から流入する大荷田川の水量が加わって、やっと浮ぶ状態になったと思うと、もう羽村の配水塔が、羽用水の桜並木のむこうに見えて来た。羽用水に沿って続く桜並木は用水組合の人たちの手によってきれいに管理され、花見の頃には多くの人が集まる所である。

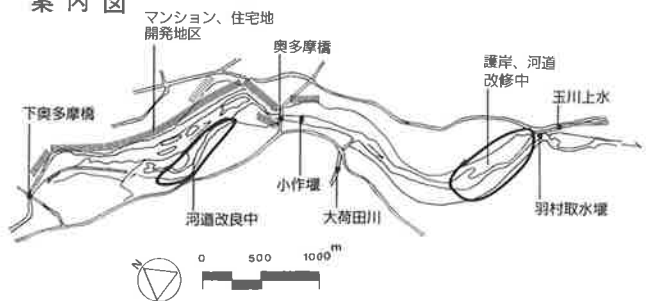
羽村の堰が見えるカーブを曲ると、右岸堤防越しに羽村町の郷土博物館が見える。そして左岸側はいま、堤防改修工事の真っ最中でブロック積やテトラポットのまっ白い光景が飛び込んで来る。羽村取水堰の古い水門と石積が多摩川の歴史を象徴する風景であるのに較べ、何とも品のない景観としか言いようがない。

かつて羽村の取水堰から上流部は、広い水面と川原があって柳や雑木が茂り、牛柀と呼ばれる水制のための木組みが風景の中に溶け込んでいた。そして堰によって湛えられた穏やかな淵は魚や水鳥の絶好の繁殖地でもあった。羽村取水堰とこの一帯の風景は、いわば数百年にわたる自然に対する人間の英智と自然の営みが融合し、多摩川の全てを語るに等しい場所であった。

「親水」という言葉がこの20年全国を駆け巡り、多くの課題を残したにもかかわらず、この所、「多自然」という言葉が河川整備を考える次のキーワードとして登場してきた。これが何を意味するのかまだ解らないが、今ある川の自然性をどう生かすのが前提でなければ、いずれ親水の二の舞となることは明らかである。

羽村の堰上でみた光景はまさにその事を意味するように思えた。

案内図



財団からのお知らせ

〈第二次研究助成選考結果〉

去る11月15日第29回定時選考委員会を開催し、平成2年度（第2次）研究課題の選考を行いました。今回選考された研究はA類研究2件、B類研究3件です。研究課題は次のとおりです。

研究課題	代表研究者	所属
（A類研究）		
多摩川の表流水および河床付着層に生息する細菌群集の存在状態の解析	森川和子	東京農工大学一般教育部助教授
多摩川中・下流域における農薬起源の硫黄含有有機化合物の濃度分布とその生物濃縮機構に関する研究	大槻晃	東京水産大学海洋生産学科教授
（B類研究）		
多摩川河川敷に発生する陸生ユスリカの研究	小林貞	カリタス女子高校教諭
多摩川にやさしいライフスタイルの研究	鈴木敬子	日本ヒーブ協議会エコリングホォーラム代表
多摩川中流域における地学の教材化の研究	清水政義	都立桜町高校教諭

〈研究助成成果検索システムについて〉

本誌第46号で紹介した、当財団の研究助成成果検索システムについて、都立多摩図書館から取材に來られ図書館発行の「行政郷土資料だより」（1月30日発行）に検索システムが紹介されました。

是非ご覧ください。

このシステムは、すでに事務局で皆様にご利用できる体制をとっていますのでご活用下さい。

〈行事紹介コーナー新設のお知らせ〉

当財団では本誌次号より多摩川流域で開催される、川および流域の環境問題に関するシンポジウム、講演会、展示会、自然観察会等の催物を紹介する「多摩川流域行事のお知らせ」欄を設けます。

主催者はどなたでも結構です。行事の予定、日時、場所、行事名、主催者名、問い合わせ先を明記し財団事務局宛郵便またはFAXでお送り下さい。

なお、行事の内容、時期が未定でも概要をお知らせ下さい。編集委員会に諮り掲載を決定させていただきます。

発行日は3月、6月、9月、12月の年4回を予定しています。

FAX番号 03-3400-9141

〈寄贈文献の紹介〉

『多摩川はつらいよ』 —— 子どもと見つめた自然と社会 —— 小菅盛平

(社)農山漁村文化協会 1990年12月

この本は、和光小学校の子供たちによるまさに多摩川体験の記録である。学校のカリキュラムのテーマに多摩川を選び、子供の視点を通してさま

ざまな多摩川の姿が生き生きとつづられている。

多摩川の立場に立ってつけられたタイトルは、皮肉でも何でもない素直な感想であろう。

『川崎の古民謡(下)』 角田益信 1990年11月 TEL 044-922-7593

1986年に発行された同名(上)に続くもので今回は、わらべ唱と娯楽唄等を中心に収録されている。著者は昭和30年頃からテープレコーダーにより

演唱者の唄を収集してきた。

次第に消滅していく古民謡の記録として、貴重な資料である。

玉川上水シンポジウムに出席して

玉川上水の取入口のある羽村町の主催で2月23日、羽村町コミュニティセンターにおいて『玉川上水シンポジウム』が開かれた。

羽村町は、今秋、市制を目指している。

まだ住む人の少ない時代から、玉川上水開設以来町民は皆、玉川上水を、「お堀」と呼んで大切にこれまで守ってきた。

玉川上水を愛する羽村町の関係者の方々の熱意がこのシンポジウムを可能にしたのである。

井上篤太郎 町長の挨拶に始まり、基調講演は木村尚三郎 東大名誉教授 が水の文化の東西をテーマに、パネルディスカッションは 西谷隆旦 法政大教授、水道史研究家の 栄森康次郎 氏、神吉和夫 神戸大助手、日本測量調査技術協会理事の 三上知孝 氏、コーディネーターは南秋留小校長で羽村町 郷土博物館運営協議会委員の 坂上洋之 氏が務めた。

玉川上水の謎に迫るといふ、興味あるサブテーマに、ホールも満席となり、熱気があふれた。

期待された、はたして 建設者が 玉川兄弟であるかという謎に対しては、どのパネリストも資料としての『上水記』、或いは『玉川上水堀割之起発並野火留村引取分水口訳書』の安松金右衛門の存在について、軽く触れるのみで、新しい謎の解明は無かった。

工期についても、8ヵ月とする説、1年半とする説があるが、このシンポジウムではあまりふられることはなかった。

謎が解かれれば、謎で無くなるので、この際いたしかた無いのではとの話で会場は大笑いだった。

西谷氏が、玉川上水水路考として、全体の流れの状況を説明され、記録資料としての『上水記』

『玉川上水堀割之起発並野火留村引取分水口訳書』をとりあげ、玉川上水の工事に関連して三つの疑問点をあげている。

短い工事期間と工費、取水口地点の選定、野火止用水との関連である。

また、羽村堰 の特徴として、「湾曲斜め堰」という河の特性に合わせた構造となっていることについて話があった。

栄森 氏は玉川上水が、江戸東京水道400年の歴史において、近代大量水道の建設、利根川の水の導入、と並ぶ3大事業の一つであることを強調された。

神吉 氏は玉川上水の江戸市中における構造と機能について技術的に詳しい説明があり、当時の生活用水としての、玉川上水の役割を述べられた。

三上 氏は玉川上水の測量方法について、水平器等の器具及び実際の測量の状況についてのお話があった。

全体的に、専門分野に掘り下げた話が多く参加者が熱心にノートをとる姿がみうけられた。

シンポジウムの後の、質疑応答は大変な盛り上がりでとかく、形式的になりがちなこの種の催しには珍らしく、心の交流が見られ、成功裡に幕を閉じることができたのは、関係者の方々の郷土を愛する熱意によるものと思われた。

今回のシンポジウムに参加された方々が、これを機会に研究を深められ、玉川上水という、江戸にさかのぼる 東京の水道の原形をきわめられることを願ってやまない。

郷土を愛する事は、多摩川を愛することでもあるからである。

事務局長 芳村重徳

- 発行日 平成3年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141

